

## 第2回イスラーム講演会 「サウジアラビアの文化と社会」 開催

平成26年12月6日(土)14時から文京キャンパスC館にて平成26年度第2回イスラーム講演会が開催された。講師は、駐日サウジアラビア大使館文化部文化アタッシュでありサウジアラビア国立イサーム・ムハンマド・イブヌ・サウード・イスラーム大学準教授であるイサーム・ブハーリー博士で今回のテーマである「サウジアラビアの文化と社会」について講演していただいた。イサーム博士は、国籍はサウジアラビアであるが、名前のブハーリーから分かるように祖先は中央アジアのブハラ出身で容貌は、日本人と似ていて親しみやすい。更に、2002年に早稲田大学理工学部を卒業された後、同大学の大学院へ進み博士号も取得されているくらい日本で長く生活されて、日本語には不自由されない日本通でもある。今回の講演も通訳を通さない日本語の講演であったので参加者にも非常に喜ばれた。

ここでは、その講演の要約を報告する。

### 1. 世界各国の地図から考える

イサーム博士は、最初にそれぞれの国が使っている世界地図を見せて、当然のことながら日本の地図では、中心に日本があり、サウジアラビアの地図ではその中心がサウジアラビアにあり日本は東の端にある。オーストラリアの地図は、南北が逆さまで、同じ地図であっても世界

は多様な見方が存在することを見せてから、これと同じように世界には多様な文化歴史が存在し、様々なもの見方や考え方が存在することは当然とする。政治問題で意見が異なるのは仕方がない、重要なのはぶつかることではなく、いかにして相手の考え方を理解するかと言うことであり、そのための努力が必要であることを強調した。

### 2. 経済、人口から見た地図から考える

経済力の大きさから見た地図では、日本やアメリカ、中国は大きい、サウジアラビアは小さい。人口で見ると中国、インドは大きい、アメリカは小さくなる。また2050年の経済を見ると中国がインドが1位になり、アメリカは3位で日本は5位になると予想される。人口はどうなるかと言えば、2100年にはインドか中国が1位になり次がナイジェリア、インドネシアなどで、日本は10位にも入らな

い。このように世界は、常に変わっている。今の大国は50年、100年後には大国ではない。今経済的には苦しい国が、50年後には豊かになっている。そこで国の指導者は、決断するとき、50年、100年のスパンで考えるべきだ。今自分の国が強いからといって他の国を抑圧したり、不当に扱ってはいけない。何故なら100年後には立場が逆転している可能性がある。自分たちの子孫のことまで考えておくべきだ。この例としてイスラームの指導者カリフ・ウマルを挙げる。彼の時代、イスラームは中央アジアまで広がっていた。そのサマルカンドにイスラーム軍が戦う前に示すべき条件(イスラームを受け入れるか、税を払って守られるか、あくまでも戦うか)を示さないままに町に入って占領してしまった。そこでサマルカンド

の住人は、時のカリフ・ウマルにこれはイスラームの正しいやり方ではないと訴えてた。ウマルは、これを受け入れイスラーム軍に町から撤退するよう命じた。それを見たサマルカンドの住人は、イスラームの公正さに感動し、全員イスラームに入信した。それから千年以上たってもサマルカンドはイスラームの町であり続けている。大学で学生にイスラームの講義をするときには、この例を挙げて将来会社の社長になったり、政治家になったりして国のリー



講演前に小倉克彦拓殖大学常務理事と歓談するイサーム・ブハーリー博士

ダーになった時には、50年、100年たっても誇りに思える行動を考えて取って欲しいと訴えている。

### 3. 世界の3分の1で通用する挨拶

現在、世界の人口の4分の1がムスリムと言われていて、将来は3分の1までになると予想されている。このムスリムの間で使われている挨拶がある。これは朝でも夜でもいつでも使える便利な言葉で、これを言えば相手がムスリムであれば国籍や言葉が違ってもすぐに親しくなれる挨拶である。それはアッサラームアライクム(あなたの方の上に平和がありますように)と言う言葉だ。このサラーム(平和)は、イスラームと同じ語源から出ていることも思い出して欲しい。

### 4. サウジアラビアと日本の共通点

サウジアラビアと日本の共通点で、地理的には同じアジアにあっ

てサウジは西の端に位置し、日本は東の端に位置するということは先に語ったが、その他にも文化的な面にもいくつかの共通点が見られる。

(1) 親孝行

預言者ムハンマドの言葉に「天国は、母親の足の下にある」とあるように両親の満足が得られなければ天国に入れないと信じられている。サウジでは、朝起きてまずやることは、両親の手と頭にキスをするのである。親子の関係が確りしていれば、家族が確りする。家族が確りすれば、社会が確りする。社会が確りすれば、当然国が確りすることになる。その一番の基礎がこの親孝行である。

(2) 見合い結婚

これは日本では最近少なくなったが、私のケースで言えば、10年前サウジに帰国した際、両親から結婚を勧められ「はい」と答え、私の祖母が結婚候補者の祖母に電話してお見合いを申し込んだ。そこから調査が始まり日本にまで自分のことを調べに来た。それに合格して、第一次面接になった。向こうの両親に会い、3時間に渡ってあらゆることを聞かれ合格した。それから最終面接で、二人きりで面と向かって話をし、その後家に帰って礼拝をして神に正しい選択が出来るように祈ってから相手に希望を伝える。結婚を望んでも相手が断れば結婚は成立しない。私の場合は、双方が合意したので2日後に相手の家へ行き婚約した。

(3) 書道

私の知る限り、世界の小学校で書道を教えているのは、サウジと日本と中国ぐらいであろう。文字が芸術の域まで高められている。

(4) お年玉

サウジでは、断食明けのお祭りで、子供たちは日本の正月のようにお年玉を貰う習慣がある。ただ異なるのは、その一部を貧しい人にあげさせることだ。それは子供であっても自分が出すわずかな100円、200円であっても人の命を救うことが出来ることを教えるためだ。自分が子供であっても社会や世界に対して果たせる責任があることを知る機会になっている。

5. サウジ人は日本をどのように思っているか

サウジ人は誰でもメイドインジャパンと書かれた物は、品質が高いと考えている。自動車でも家電製品でもサービスにしても非常に質が高く世界一だと思っている。日本のアニメについても私の世代はキャプテン翼とベルサイユのバラで育ったし、今の子供は名探偵コナンやナルトを見て育っている。日本のソフトに対しても憧れが見られる。まるで日本が別の惑星とまで言われる切っ掛けになった

テレビ番組がサウジで5年前のラマダーン中に特別に放送されたことからだ。ラマダーンの一ヶ月間、毎年サウジのテレビはゴールデンタイムに特別番組を放送する。その中で日本が取り上げられ、サウジの記者が日本に来てあらゆる所へ行って日本の現実を紹介した。そこでサウジではありえないと話題になったのが、記者がわざと現金の入った財布を渋谷の交差点そばに置いて遠くからそれをカメラで撮っていると、若いカップルがその財布を見つけて、それを持ってどこかへ移動し始めた。カメラはその二人を追ってどこへ行くか確かめた。するとしばらく歩いた二人は、交番に行き財布を警察官に渡した。それを見た記者は、日本は、この地球上の国ではない違う惑星だと言って驚いた。また公園へ行くと塵一つなくきれいだった。そこへ子供が来てフライドポテトを落とした。記者がそれを見てるとその子は落としたポテトを拾ってゴミ箱に入れたのでその子に何でゴミ箱に入れたのかと尋ねると「地球温暖化のためだ」と答えたので記者はそれにも驚かされる。

このようにサウジ人にとって日本のイメージは素晴らしいものがある。それはサウジが日本に片思いをしているレベルに達していると言える。

●日本はビックブラザー

日本との関係では、1973年のオイルショックの時、当時の三木首相がサウジにやって来た。当時内務大臣だったファハド元国王が言った言葉は、「どうぞ安心してください、日本は、サウジアラビアにとって兄（ビックブラザー）のような存在です。兄を裏切るようなことは絶対しません。日本は永遠の友人です。」と言って安心させた。

これは第2次世界大戦で焼け野原になった日本が、石油も天然ガスもないのにこのように発展できたのは日本人と言う素晴らしい資源があったからで、それを日本の奇跡と呼んで評価しているからだ。サウジ人にとって同じアジアの国として模範になる。私が日本に留学したのも日本がどのようにして発展したのか、それを勉強し将来自分の国に役立てたいと思い日本に来た。現在、私と同じような志を持ってやって来ているサウジ人留学生は600人いる。

6. サウジアラビアの基礎を作るイスラームとその誤解

サウジアラビアの基礎は、国旗の中に書かれた「ラーイラーハ イッラー（アッラー以外に神はなし）ムハンマド・ラ・スール（ムハンマドはアッラーの使徒なり）」という信仰表明の言葉に代表されるようにイスラームにある。イスラームは、キリスト教やユダヤ教と同じ神を信じる。それは日本語では水というが、英語ではウォーターと呼びアラビア語ではマーウと呼ぶような違いで指すものは同じである。イスラームは、それを変えることなく守り続けている。現在宗教対立と呼ばれるものは、それは政治が宗教を利用したところから生まれている。かつて預言者の時代には、同じ共同体の一員としてユダヤ人も暮らしていたし、ヨーロッパでユダヤ人が迫害された時には、ユダヤ人たちはイスラーム世界に避難してきていた。

イスラームの平等性について言えば、礼拝では地位や富や肌の色や国籍に関係なく横一線に並んで礼拝する。毎年300万人がサウジにやって来る巡礼では、男性は全て同じ二枚の布に包まれて行事を行なう。ラマダーン月の断食では、世界中のムスリムが、一ヶ月間日の出前の礼拝から日没まで一切の飲食を断って神に感謝する。その時重要なのは、悪口や悪い行いをしないこと、日ごろ十分な食事が出来ない人々の痛みを体験しそれらの人々への援助を行なうことである。



会場風景

またジハードについては、日本では誤解されている。メディアは、これを聖戦と訳すが、これは違う。アラビア語には聖戦という単語は存在しない。ジハードには、2種類あり大ジハードと小ジハードに分かれる。小ジハードは、外敵から自分の国や、家族や財産を守るために戦うことである。イスラームの基本は、サラーム（平和）であるが、誰かが自分の生命や家族や集団を侵略して来た時、『はい、どうぞ』と断ってはいけない。正々堂々と守らなければならない。これが小ジハードで、大ジハードは、要約すれば頑張る事である。学生なら一生懸命勉強することであり、社会人なら一生懸命に正当な手段で自分の家族を養うことである。政治家は、自分の国を正しい道に指導することであり、メディアは正しいことを伝えることに努力することがジハードである。

預言者ムハンマドの時代、大部隊の軍がマディーナに迫っていた。ムスリムたちはマディーナを守るために集合した。そこに一人の青年がやって来て一緒に戦いたいと言った。預言者は、「あなたには、両親がいますか?」と尋ねると、彼は「はい」と答えた。更に『彼らの面倒を見る人はあなた以外にいますか?』と尋ねると、「いいえ」と答えた。すると預言者は、「あなたの両親への親孝行でジハードをきなさい」と言って、その青年を返した。

これがイスラームのジハードだ。

## 7. サウジアラビアと日本

イスラーム世界におけるサウジアラビアを考えると、何と云っても世界中のムスリムが礼拝のたびに向き合う方角であり預言者ムハンマドが神から啓示を受けてイスラームの布教を始めたマッカと預言者の終焉の地であるマディーナの二つの聖地を守る国である。またマッカには、毎年3百万人の巡礼者が世界中からやって来る。これらのことは何を意味するかと言うと今や世界の人口の4分の1がムスリムと言われ将来3分の1にまでなると予想されているなかで、サウジは世界の4分の1の人と心で繋がっていると言うことだ。

経済的には、アラブ世界の中で一番でG20のメンバーの中で唯一のアラブ国である。日本は、世界3位の経済大国であり、G8、G20のメンバーである。世界に誇る技術大国。サウジとの関係では、日本が輸入する石油の30パーセントはサウジからであり、多くの外資プロジェクトを持つ。このように両国は良好であり、この良好なパートナーシップを発展させていくことは重要である。

両国関係は、1955年に始まって60周年を祝うまでになった。アラブのリーダーとして最初に日本を訪問したのは、ファイサル国王で1971年のことだった。93年には当時皇太子だったアブドラー国王が訪日し、両国関係は発展してきた。2006年にはサルマーン皇太子（2015年現在、国王）が観光大使として訪日し、その時日本とサウジアラビアの包括的パートナーシップという共同声明が出された。

## 8. 日本とサウジアラビアの文化交流

現在、サウジアラビはアブドラー国王奨学金プロジェクトで全世界へ15万人のサウジアラビア人留学生を派遣している。2002年には国立大学が8つしかなかったが、今では20以上になり私立大学を合わせると40ぐらいになっている。これは日本の明治維新に倣ったものである。日本に留学しているサウジの留学生は、日本語を学び日本文化を理解し多くの日本人の友人を作って、卒業後は日本企業に入る者が多い。帰国しても中東に投資している日本企業に入り第一線で活躍している。これらの留学生たちは、いわば日本とサウジアラビアの未来への投資である。

またサウジアラビアの文化を広めるために東京にはサウジアラビ

アのイマーム大学がアラブ・イスラーム学院と言う分校を開いて、アラビア語やイスラームの講座を無料で開講している。またサウジアラビアの首都リヤドでは、毎年ジャナードリーヤ祭という中東で最大の文化祭が開かれるが、2011年にはテーマ国を日本にして大々的に日本文化の紹介を行なった。また2009年にリヤドで開催された国際ブックフェアでは、日本がテーマ国になったが、翌年の2010年の東京国際ブックフェアでは、サウジアラビアがテーマ国になった。その他、2012年には大阪でサウジウィーク・イン大阪が初めて実施された。これにはサウジ人留学生が大阪弁を話すロボットを展示していた。

## 9. 東日本大震災から学ぶもの

2011年3月11日の大震災後の4月にリヤドで日本サウジアラビア大学学長会議が開催された。そこで日本の学長から震災から6日後の写真を見せられた。そこには既に復興に向けて動き出している様子が写されていた。サウジの大学の先生たちは、これは他の国だったら6週間か6ヶ月か6年かかると異口同音に感想を述べ日本人の復興への取り組みの早さに驚いた。

また震災時に多くの国は、日本に留学している学生を自国に戻したが、サウジはそれをしなかった。サウジの留学生たちは日本に残り、5月には新しい留学生もやって来た。私は何故そのようなことをしたのか国に尋ねた。答えは広島と長崎に原爆を受けて焼け野原になった日本が復興したことを日本のミラクルとして称賛してきた。こんども日本は、福島からもう一度立ち上がり世界に対して新しい日本のミラクルを見せてくれるはずだ。これは、留学生にとって最大のチャンスになる。この新しいミラクルを肌で感じ、見て学びその力の一部になるというものだった。これは日本の若者にも言えることで、彼らにはかれらの祖父母がやったようにミラクルを起こす力がある。そのミラクルを起こして欲しい。その際にはサウジアラビアはパートナーとなることができるだけの協力を惜しまない。

## 10. 最後に

世界は日々変化している。これまで日本とサウジアラビアの関係は石油と自動車とエレクトロニクスなどの貿易関係だった。それはギブアンドテイクの関係だ。しかしこれからの両国の関係は、パートナーシップの関係になるべきだ。例えば投資ファンドやイノベーションの分野でパートナーシップにならなければならない。それは両方がハッピーになることで、それだけではなく全世界の幸福のために努力すべきだ。

最後に、日本が大好きなサウジアラビアのことを思い出してほしい。日本に片思いをしているサウジアラビアのことを思い出して欲しい。



世界地図を使って講演するイサーム博士

## イスラームの法と宗教 (4)

イスラーム研究所長 森 伸生

(前号より)

### ガザリーの宇宙論

イスラーム諸学を修めスーフィーの行を極め、ウラマーの英知とスーフィーの行を融合させる過程で得たものの中から、ここにとくにガザリーの宇宙論を取り上げる。宇宙論を見ていけば、ウラマーとスーフィーの知的融合の在り方とその限界を理解することができるからである。

#### (1) ガザリーの宇宙論を構成する三つの世界：

##### ムルク(現象界)、マラクート(不可視界)、ジャバルート(中間界)

ガザリーは世界を三つに分けて見ている。一つはムルク(現象界)で我々が今いるこの世界、二つ目はマラクート(不可視界)で見えない世界、三つ目はジャバルート(中間界)で中間の世界である。

現象界は我々が今見ている世界で、ムルクという言葉が使われている。ムルクには「主権」、「王権」という意味がある。これは肉眼で見ることのできる物質世界で、大きさや量を持っていて、計量の対象となる世界である。

マラクートは心の目でしか見ることのできない神秘の世界で、霊や天使の世界である。

目に見えない世界というのは当然大きさや量を超えた世界で、「天の書板」の世界(“Ahyau”, IV. p.489)でもある。

「天の書板」とはアッラーの御許にある「守護された書板」のことである。アラビア語で「ラウフ・マフフーズ」という。「天の書板」にはアッラーの意志、決定、予定が書き込まれており、過去も現在も未来も、すべての運命、出来事が記されている。

クルアーンの一節に「いやこれは栄光に満ちたクルアーンで、守護された書板に(銘記されている)」(85章21、22節)とあるようにクルアーンは「天の書板」に銘記されている。この場合のクルアーンはムハンマドに啓示されたクルアーンの原型のことである。啓示はこの原型のクルアーンから下されていた。まず、「天の書板」から啓示が七天の最下位の天、つまり人間界の天上に下り、そこから天使がムハンマドに啓示を伝えた。

つまり、マラクートとは、理性を超えた啓示の世界でもある。段階的に言うならば、感覚の段階の彼方に理性の段階があり、理性の段階の彼方にマラクートの段階がある。従って、「生まれつきの盲人が、もし多くの人から色や形のことを充分に知ることがない状態であらうし、知り得ないであらう」(“al=Munqiz”, p.73)とガザリーが言っているが、それと同様に、理性の段階で留まる人はマラクートの存在を信じようとしないのである。信じられない人にはいくら説いてもわからないとの主張である。

ムルクとマラクートの対応関係は、両方の世界、つまり現世と来世という捉え方もしている。現世は人の死に至るまでの現実の世界で、来世は死後の世界である。だから、人の魂が肉体から離れて住まう霊界、現世の終末、来世の復活といったものは、すべてマラクートに入る。目に見える今の世界がムルクで、死後はすべてマラク

トである。

それから、ガザリーは、ムルク界はマラクート界を映し出す鏡とも言っている。鏡の中の像が実像の映像のようにマラクートの模写であり、そういう不可視の世界を模写した世界であり、それによって今の現象界が存在するという。(“Ahyau”, IV. p.489)

#### (2) 見えない世界を観るのはスーフィーの修行

鏡の中の像というのは二次的であり、原因に対する結果にすぎない。しかし、自分の姿を知るという点からは第一次的である。つまり、見えているのだから、自分にとっては一次的な世界として捉えることができ、人間はムルク界を実在と考えて、その外的形姿に騙されている。しかし、そこで真実を知ることにはできない。

マラクート界は目に見えない存在で、それは天使、霊、心(靈感)などであるが、永遠ではなく終わりがあり、つまりは被造物の世界である。

マラクート界の理解としては、目に見えない世界を理解するのであるから、ムルク界の現象による比喩や象徴によって知る他はない。故に啓示などは比喩で表される。比喩によってその真実を知ることのできる人間は理解できるが、比喩を比喩としてしか受け入れることのできない人間には、永遠に目に見えない世界であり、真実の世界を悟ることにはできないと言っている。

「われわれが譬えや比喩と言う場合、それは外的形姿に意味を与えることを意味する。したがって、人はその内的意味を見れば、それが真実であることがわかる。しかし、その外的形姿だけを見れば、それは偽りであるということになる」(“Ahyau”, IV. pp.23~24)とガザリーは言う。つまり、一般生活において人間は外側しか見ることができない。

内的に見るにはスーフィーの世界になってくる。「預言者たちは比喩によってしか人々に語り得ない。なぜなら、人々の知性に応じてしか語り得ないからである」(同書)と彼は言う。

真実を真実の通りに語っても人は理解しないからである。だから比喩で語ることになる。「人々の知性はいわば眠っている人の水準でしかなく、眠っている人に説明するには比喩を使わざるを得ない。人は死んだときに比喩が真実であると知るのである。このために神の使徒は言っている、信徒の心は慈悲深きお方の二本指の間にある、と」(同書)と彼は比喩の例を出した。

「これは霊知者のみ理解できる比喩である。それには、夢の象徴理解を夢解きと呼ぶように、比喩的解釈が必要であるが、患者はこの解釈を知らないために、彼らの理解は表面的な意味を出ないのである」(同書)と患者の限界を言っている。

この表現はハディースの中によく出てくる内容だが、その続きもあわせて見ると、「信徒の心は慈悲深きお方の二本指の間にある。そのお方が真っ直ぐになることをお望みなれば、心は真っ直ぐになり、逸れるように望めば、心は逸れてしまう」である。信徒の心もアッラーの御心のままであると言うことである。一つの解釈として、アラビア語の語法によれば、二本の指の間にあるものは自由自在にされることを意味する、とある。<sup>1</sup>しかし、アッラーの二本指との表現に何の意味があるのか、どのように理解すればよいのかは書か

1 日訳サヒーフムスリム第三巻p.579

れていない。それはスーフィーの知者による別な方法でしかその真の内容を感得することができないのであろう。

### (3) ガザリー存在論による四つの次元

マラクート界と人間、つまりは不可視界と人間というのはどういう形で存在するのか。ガザリーは存在論で四つの次元を示し、不可視界と人間の関わりを説明している。

四つの次元というのは、一つの次元が「天の書板」、つまりは「真実の存在」①である。二つめの次元は自然的、物質的存在で、感覚によって知られる「自然的存在」②、つまりは人間のいるところである。三つ目の次元が「想像的存在」③で、つまり現象界にある事物の感覚的イメージである。四つ目の次元が「知的存在」④、つまり感覚的イメージから抽出される事物の本質、普遍的概念の意味である。このような四つの次元がこの世に存在する、と彼は言う。

(“Ahyau”, III, p.20)

中村廣治郎<sup>2</sup>は人間が真実を知る方法として、ガザリーの示す四つの次元の関係を次のようにまとめている。まず基本的には②→③→④の過程である。この過程はすべて人間の内部で生起し、その結果として得られたものは、本質的には「天の書板」、つまり真の存在の世界に記されていることと同じである。つまり④に到達したならば、①に書いてあることが理解でき、一般的な存在から想像的な存在になり、最終的に知的存在になる。

もう一つの方法が①→④と直接行く方法である。人間の心と「天の書板」を隔てる障害が取り除かれると、「天の書板」に人は真実を見る。または、「天の書板」から人の心に真の知識が直接流出する。これがスーフィーたちの目指す過程である。「天の書板」を直接に知ることのできる方法というのがスーフィーの修行である。スーフィーの修行によって「天の書板」との中間にある障害物をすべて取りさることになる。

三つ目の方法が①→④→③である。これは預言者によって天上界からの直接的知識が言葉や象徴によって人々に伝達される時、預言

者に①から直接そのまま④の状態を与えられる。その後、③のイメージの状態へと下って、人間がイメージの状態で知ることができる。つまり、預言者を通じた形で不可視界の知識を得ることができる。ここでガザリーは「人間の心にある二つの窓」という表現を使っている。つまり、人間の心には二つの窓があり、一つは現象界、もう一つは不可視界に開いている。故に、この三番目の方法が可能になるとしている。<sup>3</sup>

ここに、四つの次元を神から人間へのメッセージの在り方とあわせて考えることができる。メッセージの在り方には、三種類がある。それはクルアーンの一節「アッラーは、啓示（ワヒユ）によるか、帳の陰からか、または使徒（天使）を遣わし、お許しによってお望みのことを啓示されること以外に、人間に語りかけることはない。本当にアッラーは至高にして英明であられる」（42章51節）に示されている。

一つはワヒユである。ここでは啓示との訳があてられているが、クルアーン解釈書によると「正夢（ルウヤー）」とある。「正夢」によって神からのメッセージが伝えられることがある。預言者ムハンマドも「正夢」を得ており、それは預言者の使命を受ける直前のことであったと伝えられている。「正夢」は預言者だけに起こることではなく、徳を積んだ人物（いわゆる聖者）にも与えられる。

二つめは「帳の陰から」である。これは神が直接、預言者に語りかける方法である。預言者モーゼに起こったメッセージの在り方である。預言者ムハンマドもエルサレムの大岩から昇天し七天の最上天にて神から直接メッセージを受けたことがある。

三つめは「使徒を遣わし」てメッセージを伝える方法である。これはムハンマドにクルアーンを伝えた方法である。クルアーンは天使ガブリエルによって伝えられたメッセージだけである。

以上のメッセージの在り方は上記の①→④の状態になる。「正夢」は預言者にも聖者にも起こるが、預言者はメッセージを人々に伝える義務があるので、①→④→③となる。しかし、聖者にはその義務は生じないので、①→④に留まることになる。

神からのメッセージはあくまでも神からの一方的な行為である。預言者はメッセージを受け止めるだけの生来の資質を持っていることになるが、聖者はその資質を修行によって得ることになる。ゆえに、聖者の修行はメッセージが与えられた場合に受け止めるための受け皿を作る作業といえる。さらに預言者の伝える知識が③の状態にあるので、一般の人間は②→③→④の過程を経て真実を知ることができる。と理解される。

### (4) ジャバルートという中間界

ムルクとマラクート以外、もう一つジャバルートという存在がある。これについて、ガザリーは「第一に、ジャバルート界はムルク界とマラクート界の中間世界である。第二に人間、人間の諸能力、知覚や認識のプロセス及び行為を導く力、或いは心と肢体の間にあって様々な感情が現われる胸に関係がある」<sup>4</sup>と捉えている。

先述したように、人間は現象界と不可視界に開かれている二つの窓を持っていて、それをつなぐのがジャバルート界である。ゆえに、ガザリーは最終的に人間そのものをジャバルート界と表現した。

そこで、ガザリーが三世界を比喻で説明しているので多少長くなるがここに紹介する。

2 著書：『イスラム—思想と歴史』（東京大学出版会、1977）、『ガザリーの祈禱論』（大明堂、1982）、『イスラムと近代』現代の宗教一三（岩波書店、1997）、『イスラム教入門』（岩波新書、1998）、『イスラムの宗教思想—ガザリーとその周辺』、Al-Ghazali on Invocations and Supplications (Cambridge, 1990)、Ghazali and Prayer (Kuala Lumpur, 2001)、

訳書：Gazali on Prayer（東京大学東洋文化研究所、1973）、スミス『現代におけるイスラム』（紀伊国屋書店、1974）、ニコルソン『イスラムの神秘主義』（東京新聞出版局、1980）、ハッラーフ『イスラムの法—法源と理論』（東京大学出版会、1984）、リーマン『イスラム哲学への扉』（筑摩書房、1988）、ガザリー『誤りから救うもの』。

中村廣治郎は、東京大学のイスラム学研究科の教授としてイスラム学の研究に長年従事し、その間、数多くのイスラム研究者を育成し、今日の日本のイスラム研究を築いた人物と評価されている。

中村がイスラム研究を続ける中でも、とくにガザリー研究に傾倒したのは、ハーバード大学にてガザリーの著書『誤りから救うもの』に遭遇したからである。その時受けた衝撃を「同書の一部を読んで、干天に慈雨を得たような感動を覚えた」と同書翻訳本の序に記して、その理由は「怒られた信仰の確信を求めて苦闘し、ようやくスーフィズムの中にそれを見いだした人間ガザリーの、宗教の違いを超えた生の声が伝わってくるように感じた」と述懐している。

今回の「ウラマーとスーフィーの思想的融合におけるガザリーの歴史的意義」を執筆するに当たり、中村氏のガザリー研究を基盤として、その翻訳（『誤りから救うもの—中世イスラム知識人の自伝』全訳、『宗教諸学の再興』抄訳）、解説（『イスラムの宗教思想—ガザリーとその周辺』）を大いに活用した。それにより、ガザリーの到達した信仰は今後の世界に大きな示唆を与える歴史的意義のあることを確信した。

3 中村廣治郎『イスラムの宗教思想—ガザリーとその周辺』、pp.107～108

4 前掲書、p.111

「君の（進む）この道において世界は三つあることを知るがよい。第一がムルクとシャハーダの世界（現象界）である。確かに紙、インク、ペン、手はすべてこの世界のものである。君はすでに容易にこれらの段階を通過した。

第二が私の背後にあるマラクート界である。もし君が私を通り越せば、その段階に達する。そこには広大な空間、高く聳える山々、深い大海がある。

第三がジャバルート界で、ムルク界とマラクート界の間にある。……ムルク界とマラクート界の間のジャバルート界は船に似ていて、陸上に行くのと水上に行くことの間である。船は水上の混乱の中にはないが、さりとて陸上の安穏と安全の中にもない。

地上を歩く者はムルク界を歩く者である。彼の能力が強くなって船に乗れるようになれば、彼はジャバルート界を歩く人ようになる。彼がついに船に乗らずに水上を歩けるようになれば、彼は迷わずにマラクート界を歩くのである」（“Ahyau”, IV, pp.244~45）。つまり、ジャバルート界（中間界）を難なく通ることができれば、その者は不可視界へと入ることができる。

「船」とは、「神がその予定を執行すべく人間を動かすその内的精神的プロセスを表す」<sup>5</sup>と中村廣治郎は表現した。そこでは既に神の定めが入っているわけである。

「人間の内部に生起する知識、判断、意志、力及び様々な感情は確かに不可視であり、従ってムルク界のものではない。それはまた、これらすべてを人が自ら意識しており、且つそれらを自己のものとして知っているがゆえに、マラクート界のものでもない。しかし、それらは実際には神のものであり、マラクート界に属するものであるが、人間はそれを知らない。知的にはこの事実を知ってはいても、それをそのようなものとして悟得することはない。故に、船は陸上と水上の中間、つまりジャバルート界の乗物であり、その上位にあるのがマラクート界である。他方、水上を歩くとは、彼が神の単なる操り人形にすぎないことを知るだけでなく、そこで自我性を否定することによって、操り人形そのものになることを意味する」<sup>6</sup>と続けて中村は解釈した。

つまり、神は人間に肉体と精神の部分を創造した。その関係は、可視性の観点からは、肉体はムルク界であり、精神はマラクート界である。しかし、その所有性の観点からは肉体はもちろんのこと、精神も人間が自分のものと考えていることからムルク界である。しかし、実際には、精神もアッラーの創造物であることから、マラクート界ということができるのである。

人間はそのことをクルアーンとハディースからの知識として知ることができるが、その真の内容を一般には悟得することはできていない。神の定めを自分が意識する以上の形で同化する状況になった時、初めて船というものに乗ることができるとガザーリーは言っているのである。

つまり、船とは「悟得に至るプロセス」ということになる。悟得した者はマラクート界を歩くことができるのである。そのプロセスを必要としない人間が神から選ばれた預言者であるといえる。一般の人間にとってはスーフィーの修行によってそのプロセスを経ることができ、マラクート界をかいま見ることになる。つまり、船を必要としていることになる。

結論として、ジャバルート界（中間界）とは、第一に人間の個体

全体を表し、第二に知識から外的行為への衝動に至る人間の内的プロセスを指すことになる。重要なことは、不可視界（マラクート界）でも現象界（ムルク界）でもすべて神の創造したものであるということである。

そして、存在論として世界はマラクート界とムルク界の二つの世界であり、認識論としてはその中間世界のジャバルート界を考えて三つの世界があるということになる。ジャバルート界は観念の世界であるムルク界にもマラクート界にも領している世界であるからである。

## イブン・アラビー（1165～1240年）の位相

ウラマーとスーフィーの対立を克服したガザーリーの到達した境地や宇宙観に満足しなかった次の世代であるイブン・アラビーの思想を紹介したい。ここでイブン・アラビーのイスラーム神秘思想家としての位相を見て、次にガザーリーとの比較を試みることにする。

### (1) 幻視体験を持つ幼年期

彼の完全な名はアブー・バクル・ムハンマド・イブン・アラビー・アル＝ハーティミー・アル＝タイイーである。彼はスペイン南部ムルシアでヒジュラ暦650年／1165年にタイ族の純粋なアラブ家系に生まれた。一般に、イブン・アラビーの名で知られており、ムフイー・アル＝ディーン（宗教の再興者）と敬意を込めて呼ばれていた。

彼はムルシアで幼、少年期を過ごした。幼少の頃から病気の際の幻視体験など、不可視界に対する感受性は非常に強かった。後に、セビリアに移り、そこで成長し、初等教育を受け、法学、ハディース学、神学を学んだ。

彼がスーフイズムの道に入ったのは20歳のときと言われている。師としてはイブン・アフラフ・クミーなどがいたが、クミーは北アフリカの有名な聖者アブー・マドヤーンの弟子である。イブン・アラビーはアブー・マドヤーンとは直接会わなかったが、しばしば彼を「我が師」と呼んでいる。なぜなら、二人の間には霊の交流があったと伝えられている。

イブン・アラビーの父親は、コルドバの最高法官でアリストテレス解釈の巨匠イブン・ルシュド（1126～98年）とは親しい仲であった。そこで、父親がイブン・アラビーをイブン・ルシュドのもとへ使いをだしたことがあった。それがイブン・アラビーとイブン・ルシュドとの最初で最後の出会いであり、その時、大哲学者イブン・ルシュドはイブン・アラビーの優れた知力と深い精神的洞察力に、突然顔面蒼白となり身体は震えるほどに驚愕したとのことであった。

イブン・アラビーは後に、その時の出会いを回想して次のように記している。

「家に入ると、哲学者は立ち上がり、友情と敬意の態度を示しながら、私に近づき、私を抱擁した。そして彼は『諾（ナーム）』と言った。私も彼に「諾（ナーム）と答えた。私が彼の真意を理解したことを認めるや、彼は満面に喜びの表情を見せた。彼の喜びを歓喜したものが何であるかを認めた私はすぐに付け加えて『否（ラー）』と言った。するとたちまちイブン・ルシュドは縮み上がり、顔色を変えた。

彼は自分の考えについて疑いをもったものか、次のように質問した。『証明と神の靈感を通じて、どのような解決を見いだしたのか。』私は答えた『諾と否。諾と否の間で、魂は物質から逃れ、頸は身体

5 前掲書、p.117

6 中村前掲書、p.117

から離れるようになったのです。』すると、イブン・ルシュドは青ざめた。私は彼が震えるのを見た。彼は『神よりほかに力なし。』とつぶやいた。彼は私が仄めかしたことを理解したのである。<sup>7)</sup>

この両者の邂逅について、井筒俊彦はつぎのような説明を付している。

「イエスとノー。イエスとは説教的な思弁哲学的思惟の道と、それを通じて確立される神と実在の哲学を肯定すること、ノーとは神と実在とを現象的意識において否定しつつ、その否定の道の極処、無の深淵において開顕する絶対者に逢着しようとする神秘道のことであります。

質量的なものに纏綿された肉体的『われ』の思惟であるスコラ哲学と、質量的な要素を離脱して純粹精神に変貌し、いっさいの存在者を無に帰しながら、万物無化の道をたどりつつ、自ら無の主体となる、スーフィーの主体となる、スーフィーの体験の否定道とがここに際立った形で対照的に現れております。

そしてまたイブン・アラビーばかりか、スコラ哲学の大立者だったイブン・ルシュドすら、この二つの道の鋭い対立をいかに生き生きと実存的に意識していたかということを如実に物語る面白いエピソードであります<sup>8)</sup>。

後にスーフィズムの最高峰となるイブン・アラビーと時の哲学の長老イブン・ルシュドは禅問答とも思える対話にて、相手の実力を感得できた達人二人であった。

## (2) 修行の遍歴

1195年、30歳の頃、彼はスペインを始めとして北アフリカ各地を旅行して、行く先々で多くのスーフィーに会い研鑽を積んだ。また、活発な著作活動もこの頃から始まる。

33歳の頃まで、アンダルシアと北アフリカの諸都市で過ごし、スーフィーや学者たちと出会い、ときにムウラズィラ派のような諸派と論争もしている。

この時期を通じて、イブン・アラビーは神的顕現のヴィジョンを持ち続け、宇宙を支配する見えざる階層などのヴィジョンで見ていた。

この頃に、イブン・アラビーはムルシアで神の座を支える光の柱を鳥が飛び交うヴィジョンを見た。そして、その鳥が彼に東方へ旅立つように命じたと伝えられている。

それから1200年、35歳になって、その命に応じて、マッカを目指して巡礼の旅に立ち、以後、彼は二度と故郷の地を踏むことはなかった。

チュニス、カイロ、エルサレムと逗留しながら1201年、彼はマッカに到着し、3年間滞在し、数多くの著作をこの地で著している。生涯の大作「マッカ啓示」を書き始めたのもこの滞在中であった。

イブン・アラビーはマッカからイラク、アナトリア、シリア、パレスチナ、マッカ、エジプトを遍歴し、各地のスーフィーたちと親交を深めた。

時には、法学者たちとの論争にしばしば巻き込まれることがあり、たとえば、1207年にはカイロではその主張の獨創性ゆえに暗殺されかかっている。

その後、彼はアナトリアに向けて出発し、長期間にわたってアナトリアに滞在した。またこの地にて、後に彼の最大の後継者となる

サドルッディーン・クナーウィーを弟子としている。また、1211年には、バグダードに向かい、スフラワルディー教団の創始者であるシハーブッディーン・スフラワルディーに会っている。

## (3) 晩年の地ダマスカスにて瞑想と著作

北アフリカと西アジアを遍歴したのち、最後にイブン・アラビーはイスラーム世界全域で有名になり、晩年は1223年にダマスカスに定住し、その地のアイユーブ朝の君主の厚遇と法官であるイブン・ザキーの庇護を受け、瞑想と著作に専念した。1240年に他界し、彼の墓はこの地の近郊カーシューン山の麓サーリヒーヤの墓地にあり、後に多くのスーフィーたちの巡礼の場所となっている。

イブン・アラビーの著作は膨大な数があり、その数800を超えると言われているが、現存するものでもおよそ400はある。その中でも、とくに神秘主義、秘教学の百科事典ともいえる全560章の『マッカ啓示』や、1233年に完成した27章からなる『叡智の台座』がその代表作である。この題名は、各々の「台座」が預言者たちの一人一人に啓示された神的叡智の一面を象徴する高価な宝石を受け容れる、という意味である。

## (4) 後世へのイブン・アラビーの影響

イブン・アラビーは存在論的認識哲学をベースとした宇宙論的の神学を展開し、宇宙を絶対無限定な「存在」の表れとする「存在一性論」や人間を宇宙の範型・小宇宙とみなす「完全人間」説を唱えたが、彼の思想は後代のイスラーム文化全体に大きな影響を与えたものの、イスラーム世界に激論を生み出した。

彼を攻撃する者は彼を異端者と呼び、彼を支持し擁護する者は彼を「最大なる師」と呼び尊敬した。17世紀頃には、支持者が優勢となり、イブン・アラビー思想を中心とする神秘主義がイスラーム世界を凌駕していた。そして、19世紀に西欧思想が導入され近代化が始まるまで、神秘主義思想がイスラーム世界を支配していた。

近代に入り、これまでの神秘主義に対する反動として、近代合理主義、啓蒙主義、イスラーム復古主義などによって、神秘主義はイスラーム世界の後退の原因とされて、激しい非難的とされた。逆に、イブン・アラビーを最も激しく非難していたハンバル学派イスラーム法学者、イブン・タイミーヤ(1258~1326年)が現代のイスラーム世界で高く評価されるようになった。

イブン・アラビー思想の再評価はイスラーム世界よりも、テクノロジーの支配する近代的物質文明に疑問を持ちはじめた西欧で起こっている。すでに、今世紀初頭に、フランスの秘教的思想家ルネ・ゲノン(1886~1951年)は、西欧では失われた「原初的伝統」を探求するうちに、イブン・アラビーの思想と出会い、彼の存在一性論などによりながら、諸精神的伝統の究極的一致と、西洋的伝統の再生を説いたのである<sup>9)</sup>。

(次号に続く)

7 S. H. ナスル『イスラームの哲学者たち』、p.148

8 井筒俊彦『イスラーム哲学の現像』岩波書店、2007年、pp.20~21

9 モロジャコフ・ワシーリー未発表稿「異文化からイスラームへの道—ルネ・ゲノンと田中逸平」。田中逸平研究会第7回報告。2006年6月30日。

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所  
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14  
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416  
ホームページURL: http://www.sri.takushoku-u.ac.jp

拓殖大学 イスラーム研究所 ニュースレター

平成27年3月20日発行 第46号  
発行人 拓殖大学イスラーム研究所  
編集人 イスラーム研究所客員教授  
柏原 良英

## 正統四代カリフの時代－アブーバクル (23)

(前号より)

### 「預言者の側近としてのアブーバクルの地位」

これまで述べてきたことによって理解されることであるが、預言者の側近としてのアブーバクルの地位は誰もが認めるところであった。預言者はアブーバクルの徳について多くのことを語っているののでその幾つかを挙げてみる。

●「私がわが主以外に友を得るとしたならば、私はアブーバクルを選ぶであろう。」

●アムル・ブン・アルアースが預言者に「あなたを最も愛しているのは誰ですか。」と尋ねた。彼は「アーイシャです。」と答えた。そこで、アムルは「男では」と尋ねた。彼は「彼女の父親です。」と答えた。「それから、次は」と尋ねると「ウマル・ビン・ハッターブです。」と答えて次々に男の名前を上げていった。

●ある日、預言者が人々のところに出ていき、モスクへ入った。そのとき、アブーバクルとウマルが彼の左右にいた。彼は二人の手を取りながら、「このようにして、復活の日、私達は復活します。」と言った。

●アッラーの使徒は別れの巡礼から戻ってきたとき、説教台へ昇って、アッラーを讃え、次のように言った。「人々よ、アブーバクルは決して、私に不快なことを一切行なわなかった。彼についてそのように承知しなさい。人々よ、私は彼に満足している。そして、ウマル、ウスマーン、アリー、それから、タルハ、アズバイル、そして、サアドとアブドゥラハマーン・ブン・アウフ、そして、最初に聖選した人達である。彼らについてそのように承知しなさい。」

●預言者を囲む会合においてもアブーバクルには特別な場所が与えられていた。たとえ、緊急の用件で遅れたときでも、誰もその場所に座ることは許されなかった。アンサーの一人がそのことについて次のように伝えている。「アッラーの使徒様を囲む会合が非常に込み合っているときでもアブーバクルの場所は常に空けられていて、誰もそこに座ろうとはしなかった。アブーバクルが来てその場所に座ると、預言者は彼を歓迎した。アブーバクルは預言者に事の次第を話し、人々もそれを聞いていた。」

●アッラーの使徒は何かを告げるときに、アブーバクルとウマルが不在でも、たびたび「私は何々を信じ、アブーバクルもウマルも同様である。」と人々の前で言った。それは二人の信仰の偉大さを、また預言者の二人への信頼を明らかにするためであった。・・・

●預言者はアブーバクルの地位、徳、イスラームへの先行性などを人々の前で知らしめていた。そればかりではなく、人々にもそのことを広めるように求めた。ある時、預言者はマディーナの詩人ハッサーン・ビン・サービトに尋ねた。「そなたはアブーバクルについて何か詩を詠んだことがあるか？」彼は「はい」と答えた。預言者は「ではそれを詠んでごらん。聞きたいものだ。」と言った。そこで、彼は次のような詩を詠んだ。

高い洞窟のなかで、二人のなかの二番目のお方

敵がその周りをまわり、より高く山を昇った  
彼はアッラーの使徒に愛された人物であった。人々は知った

彼らのなかで彼と同等の男はいないことを

預言者は声高らかに笑い、次のように言った。「ハッサーン、そなたは真実を述べた。彼は確かに、そなたが詩に詠んだような人物である。」

ハッサーンは預言者の詩人という敬称で呼ばれていた。・・・

●預言者のアブーバクルに対する様々な言葉により、教友達はアブーバクルの信仰、人徳、高潔な人格をさらに認めるようになり、アブーバクルを尊敬し、彼との言い争いをできるだけ避けるようになった。そのような様子をアブーバクルが伝えている。

私が預言者のもとに座っていたとき、アブーバクルが服の裾を膝が見えるほどにまくり上げて近付いてきた。そこで、預言者はあわてて座ったアブーバクルに「そなたの友と口論したそうだが。」と言った。アブーバクルは預言者に挨拶をして、次のように言った。「そうです、ウマルとの間で些細なことがありました。私は彼について荒い言葉をはいてしまいました。そのことで、非常に後悔しましたので、彼に許しを求めましたが、断られました。そこで、あなたのもとにきました。」預言者は「アッラーはそなたをお許しになるであろう。」と三度言った。それから、ウマルもやはりアブーバクルの求めを断ったことに後悔して、アブーバクルの家に行ったが、アブーバクルは居なかったので、預言者の所へやってきた。彼は預言者に挨拶をした。だが、預言者の顔色が見る見るうちに怒りで変わってきた。アブーバクルが預言者をなだめるほどであった。ウマルは膝まづいて言った。「アッラーの使徒様、アッラーにかけて、私はアブーバクルに二度も悪態をついてしまいました。」預言者は次のように言った。「アッラーがそなた達のもとに私を遣わした時、そなた達は私を嘘よばわりした。ただ、アブーバクルだけが私を信じた。そして、彼の身も財産も投げ出して私を助けてくれた。私の友のことは私にまかせてもらえるかな。」預言者は二度も同じことを繰り返した。その後、ウマルは責められることはなかった。・・・ (次号に続く)

### 研究会報告

#### 【平成26年度第5、6、7回タフスィール公開研究会開催】

今年度第5回目のタフスィール(クルアーン解釈)公開研究会が、平成26年12月20日午後2時より文京キャンパスC館で開催された。講師は徳増公明当研究所客員教授でクルアーン第12章ユースフ章99～111節、第13章雷電章1～4節を解説した。第6回目のタフスィール公開研究会が、平成27年1月24日午後2時より文京キャンパスC館で開催された。講師は柏原良英当研究所客員教授で第13章雷電章5～19節を解説した。第7回目のタフスィール公開研究会が、平成27年2月28日午後2時より文京キャンパスC館で開催された。講師は武藤英臣当研究所客員教授で第13章雷電章20～43節を解説した。

#### محتويات العدد

- 1 . المحاضرة عن الحضارة والمجتمع السعودية  
الملحق الثقافي في سفارة المملكة العربية السعودية : الدكتور عصام البخاري
- 2 . مقالة عن الشريعة الإسلامية والدين (4)  
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
- 3 . مقال : الخلفاء الراشدين (23)  
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
- 4 . أخبار المعهد: الدورات الخامسة والسادسة والسابعة
- 5 . لدراسات التفسير (سورة يوسف، سورة الرعد)